



俳句

うえの
上野

りょう
燎

山口市
(1927～2016)



【著作】

句集『野火』（昭和47・風発行所）
句集『尉鵒』（平成3・永田書房）
句集『望郷』（平成19・文学の森）

ー代表句ー

睫ながき死顔なりき花の雨
友の死をまくなぎをわけ告げにゆく
強く泣けよ原爆ある世に生れし子よ
花合歡の下の泉をわが知れる
雪花啼くと夫婦同じく立ちどまり
雪中にふいにこぼれて尉鵒
をしどりを見てふるさに年加ふ
牛の眼のときどきとどき沙羅の花
向日葵の幹のたしかき校庭に
白魚のはらわた泡のごときかな
喪の人と菊人形を見てゐたる
やまがらのときどき現れて濡るるなり
ただ風を押すやうにして鶴翔てり
をしどりの離れぬ岸の暗みかな

（選・秋吉康）

上野 燎 年譜

昭和2（一九二七年）	三歳
昭和5（一九三〇年）	一四歳
昭和16（一九四二年）	一七歳
昭和19（一九四四年）	一八歳
昭和20（一九四五年）	二二歳
昭和23（一九四八年）	二二歳
昭和24（一九四九年）	二四歳
昭和26（一九五二年）	二六歳
昭和28（一九五三年）	二七歳
昭和29（一九五四年）	三六歳
昭和38（一九六三年）	三八歳
昭和40（一九六五年）	四五歳
昭和47（一九七二年）	四七歳
昭和49（一九七四年）	四八歳
昭和50（一九七五年）	六三歳
平成2（一九九〇年）	六四歳
平成3（一九九二年）	七二歳
平成11（一九九九年）	七五歳
平成14（二〇〇二年）	八〇歳
平成19（二〇〇七年）	八八歳
同年	八九歳

上野燎（本名上野五郎）は、昭和二年釜山生まれ。旧制山口中学校、旧制山口高等学校を経て、東京大学工学部卒業。東大時代に、川口重美に兄事し、俳句をはじめ。重美との問答の中で、「俳句ちゃあ何か？」と問うた燎に、重美は「俳句とは詩だ」と答えた。さらに重美は「詩とは驚きだ」と言った。このことが、その後の燎に俳句を生涯の友とする決心をさせた。以来、「風」（沢木欣一、細見綾子主宰）同人として、その終刊まで中心として活躍し、妻さち子との結婚は、その俳句人生の継続につながって活躍し、妻さち子との結婚は、晩年の相聞句集『山口にて』に詳しい。そこには青春、子育ての日々、そしてさち子との別れ：：が、句と文章で綴られている。句は一貫して実相的で写生に徹し、潔い清潔な抒情性があった。

野火の後あざやかに径在りにけり
燃え下る野火岩々を確かめつ

右は、句集『野火』（風発行所）所載の句である。直截で、大自然の威に正面から立ち向かった氣息充実の作である。昭和四十年、さち子とともに、「すばる俳句会」を立ち上げ、山口近在の俳人二十名余を育てたことは燎の大きな功績である。

句友鉛山實とは、山口大学で学部は違うが同僚となり、山口「風句会」をともに盛り上げた。燎は、新制山口高校教諭、山口大学工学部助教教授、徳山工業専門学校教授などの職を歴任し、高専教授時代は教務主事として十二年をつとめた。

学園に裏山のある良夜かな

また、山口県俳句作家協会の理事、山口市俳句協会の会長をつとめ、朝日新聞山口版俳壇の選者（平成八年～平成十四年）として後進の指導にあたるとともに、日本野鳥の会山口県支部長（昭和五十六年～平成九年）もつとめ、鳥を題材とした秀句を数多く詠んでいる。

高専退職後に、第二句集『尉鵒』、第三句集『望郷』を上梓。平成二十七年、妻さち子との合同相聞句集『山口にて』を上梓。平成二十八年病没。山口市常栄寺に眠る。

（文・秋吉康）



著書

（提供・秋吉康）

上野 燎



瑠璃光寺にある夫婦句碑

釜山市生まれ。山口市に移住。旧制山口中学校卒業（4年繰り上げ卒業）。旧制山口高等学校卒業。東京大学第二工学部航空原動機学科入学、4ヶ月で終戦。3年間の休学を挟み、4月、復学。4月15日 川口重美逝去。俳誌「風」同人。東京大学工学部機械工学科卒業。同年、新制山口高校に数学教師として赴任。山口大学工学部鉱山学科助手、機械工学科助教。結婚。妻さち子は、俳誌「濱」「風」同人。『川口重美句集』発刊。『すばる俳句会』発足。句集『野火』（風発行所）。徳山工業高等専門学校教授。教務主事（12年間）。『山口風句会』発足。徳山工業高等専門学校 定年退職。句集『尉鵒』（永田書房）。自註俳句シリーズ『上野燎集』（俳人協会）。俳誌「風」終刊 俳誌「山繭」入会、同人。句集『望郷』（文学の森）。9月、山口市瑠璃光寺庭園に、夫婦句碑建立。田を植えて螢を待つも水の上 燎 正月の雲のもしろ瑠璃光寺 さち子 『川口重美句集』（復刻版）（「山繭」発行所）発行。相聞句集『山口にて』（文学の森）。10月25日 逝去。